

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
おかげさまで今年は 創刊 24 年目
創刊 1989 年 No. 282

GEKKAN-WIEN 2012年12月号



杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 15



十月十五(十九)日にインドネシアのバンドン工科大学において我が国の大学連合主催の原子力セミナーが開催された。大学連合とは、原子力教育・研究に携わる有志十五大学が連携して、それぞれの人材育成資源を持ち

寄り、国内外で質の高い原子力人材を育成することが目的の組織であり、平成二十一年度から活動している。原子力基礎教育、グローバル原子力エリート育成、国際原子力ヤング・エリート育成、戦略的国際原子力教育の四事業より構成され、東京工業大学が代表を務め、それぞれ分科会により検討・運営



原子力セミナー(6) 大学連合

している。事業の一つである戦略的国際原子力教育は、原子力新規導入国を対象に、講師を週間程度派遣してセミナーを開催し、原子力教育基盤構築に貢献するのが目的である。これまで、マレーシア、ベトナム、タイ、サウジアラビア、モ

ンゴンでセミナーを開催してきた。筆者は、戦略的国際原子力教育分科会の主査である関係で、本年二月にタイで開催されたセミナーで幹事を務めた。今回のセミナーでは、全七名の講師陣の一人として参加し、福島原子力発電所事故について九十分の講義をした。その後、「最も重要な事故の要因は何か」、「インドネシアにとって最も重要な教訓は何か」の二課題についてグループ討論を行い、結果をグルー

プ毎に発表してもらった。インドネシアは〇二〇年代に原子力を導入する計画であるが、我が国と同様、地震、津波が多いため、出席者は真剣に課題に取組んでいた。八十名近くのにぼる参加者は、バンドン工科大学など八大学の学生、及び原子力庁、原子力規制局、民間からの若手であるが、約三分の二が女性だったのが特筆される。

さて、今月の京都とウィーンの類似点では路面電車について述べてみたい。ウィーンのパラメータは、八六五年に馬車鉄道として開業した。一八八三年に蒸気機関によるトラムが導入され、一九七七年に電化された。現在、二七九キロメートルの路線網を有し、年間約一億人の旅客数がある。ベルリンなどに次いで最も古い歴史と世界最大の電車網を有している。近年は、ハリ

には旅客数は年間一億人を超えた。七年には東京を抜いて、我が国最大の路線網を持つに至った。両市の市電は四三三キロメートルの標準軌であり、ここまでは良く似た経緯であるが、京都の市電はその後、自動車の普及により乗客減が続いて路線網が縮小され、七八年九月末にはつい全廃された。今も市民の足として親しまれているウィーンのパラメータと違った歴史を歩んだのは残念なことである。

余談であるが、筆者は学生時代錦林(きんりん)車庫の直ぐ傍に下宿があり、朝夜出入りする電車の音が聞こえた。一時は定期も買つて、電車を良く利用した。札幌での高校時代も電車で通学した。ウィーンのパラメータに乗るといつも懐かしい気分になるのは、地下鉄と違って動きがゆっくりとして街の風景が近くに見えることもあるが、学生時代を利用した電車のためでもあることに気付いた。トラムに乗ってリンク環状線のショットントリア付近を通りかかると、高さ約百メートルの塔が二つ並ぶヴォンテューフ教会にどうしても目が行く。やや古くて恐縮であるが、そのスケッチを掲載させて頂く。

*先月号の茅野副部長は部門長の間違いでた。お詫びして訂じます。

■杉本純 京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長

